

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年 1 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	■■■■■（比較文学）
-------------	-------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	タイ国王ラーマ6世の文学作品およびその前後の時代の資料にみられる「日本文化」受容の研究
-------	---

派遣期間

2010 年 8 月 1 日 ～ 2011 年 1 月 7 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	タイ	バンコク	チュラーロンコーン大学大学院 比較文学科	トリーシン・ブンカチョーン大学院 文学・比較文学博士課程主任
	タイ	バンコク	タイ国立図書館ワチラーウット 文庫	

派遣先で実施した研究内容

タイ国王ラーマ6世の文学作品にみられる「日本文化」の影響を、当時のタイにおける日本文化受容の様相を視野に入れつつ、比較文学的・文化的観点から明らかにすることを目的に、バンコク・チュラーロンコーン大学にて調査・研究に従事した。

ラーマ6世（1880～1925）は若年よりイギリスに留学しオックスフォードに学んだ王族エリートである。幼少時より文学的才能を示し、長じてはシェイクスピア劇やインドのシャクンタラーなど多くを翻訳・翻案している。さらに小説・脚本など夥しい数の作品も残しており、タイ国においては国王でありながら同時に第一級の文学者であると見做されている。

ラーマ6世の王子時代の留学先のヴィクトリア期イギリスでは、にわかにジャポニズムがブームとなり、『ミカド』（1885）や『ゲイシャ』（1896）などのオペレッタが花盛りであった。王子もそれを楽しんだことが容易に想像される。彼はまた '*O-hanasan*' という日本人女性を主人公にした小説も英語で書いている。しかしながら、こうしたラーマ6世の文学作品とジャポニズムあるいは日本文化全般の関係を扱った研究は、日本においてはもちろん、タイ国においてもまだ着手されていないのが現状であった。

そうした状況の中、今回の調査・研究では、まず、上記のような日本には所蔵されていなく、タイの機関のみに所蔵され直接あたらざるを得ない文献の探索を精力的に行った。現地では、膨大なラーマ6世の著作および関連文献の中から文学作品に関する資料を可能な限り収集した。また貴重文献に関しても許される限り閲覧し、複写可能な文献の入手にも可能な限り努めた。

具体的には、チュラーロンコーン大学やタマサート大学などの主要大学付属図書館、さらには文学関係に強いシンラパコーン（芸術）大学の図書館にてラーマ6世の文学作品に関する論文や資料を渉猟した。またラーマ6世関係の文献を最も多く有する国立図書館ワチラーウット（ラーマ6世）文庫にて資料調査を行なった。その結果、特筆すべきは、データベース化していない資料の中からラーマ6世御親筆の '*O-hanasan*' の複写版を発見し（未刊行）、図書館員の許可を得て、そ

れをコピーすることができたことである。その他、タイの文学研究者間にも知られていないラーマ 6 世文学関連資料も入手することができた。

こうした資料の入手状況および研究の一部成果を、ラーマ 6 世と日本との関係を中心としたテーマで、2010 年 12 月 17 日のチュラーロンコーン大学における国際ワークショップ International Conference on Japan-Thai Cross-Cultural Perspectives (ovc 橋本班) にて発表した。

今後は、入手した作品テキストを詳細に検証する作業が残されている。綿密なテキスト分析をし、さらに多く収集した二次文献を整理した上で、その成果を国内学会・国際学会にて発表したい。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

ラーマ 6 世による日本人女性を主人公とした小説 '*O-hanasan*' の直筆原版コピーを入手することができ、文学作品 '*O-hanasan*' 研究に着手することが可能となった。ラーマ 6 世が作品中いかに日本人女性を造形したかを知ることによって、今後、ラーマ 6 世における日本イメージという研究テーマをより進捗させることができる。

ラーマ 6 世がいまだ即位前の王子時代に撮った、芸者のお辞儀ポーズの真似とされる仮装写真の由来を明らかにすることができた。また、同じくラーマ 6 世が王子時代に日本を訪問した際の(鎌倉で着物を着た写真が残されている)、動向を一部明らかにすることができた。

派遣後の研究発表の予定

2011 年度日本タイ学会 (日本語)

及び

2011 年度国際タイ学会 (英語) または

2011 CISLE CONFERENCE Literatures in English :New Ethical ,Cultural and Transnational Perspectives